

利用者をより深く理解するために！

要介護者の生まれ育った時代を考察してみよう

「大正時代がどんな時代だったか知っていますか？」

文・早川浩士

(ハヤカワフランニング代表)

のような20代、30代の方のほとんどが、大正時代のことをこぼさないのではな
いでしょうか？

大正 スペイン風邪の流行で
多くの死者を出した
暗い時代

小島ナツさんが生まれた大正7年は、
世界的にみると、第一次世界大戦が
終結した年です。大戦中は「鉄成金」
や「船成金」が誕生し、日本経済は一
時的な好景気に沸きましたが、戦争の
終結とともに悪化、物価が高騰し、賃
金がそれに追いつかなくなりました。

特に、お米の値段は天井知らずの値
上がり続け、窮状を訴える一般民衆
が米商店などを焼き討ちする「米騒動」

こともありました。ハルさんは、介護
疲れでノイローゼ状態になり、ケアマ
ネジャーの勤めで、グループホームへ
のナツさんの入居が決まりました。
ところが、無口なナツさんは入居後
2カ月たっても、スタッフに心を開い
てくれません。「小島ナツさんとお話
したくても、何の話をしづらいのか、
きっかけが見つからないのです。趣味
もないと言うし、テレビも見たがらな
いんです」と悩む由美さんに対して、
私は「利用者の生まれ育った時代のこ
とを調べて、子どものころにあった大
きな事件などを調べてもらいたい」と
アドバイスしました。

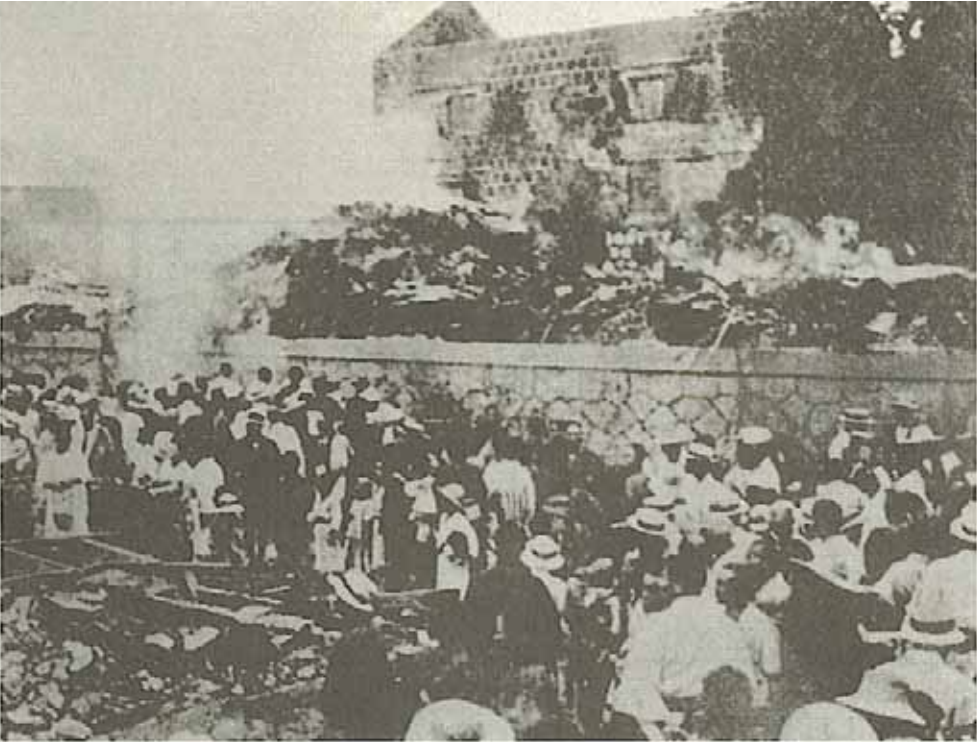
今、要介護等認定者の多くが、大正
生まれの方々です。しかし、由美さん

大正 グループホームの
スタッフに
心を開かないナツさん

私の知り合いの遠藤由美さん(22歳)
は、グループホームで働くケアスタッ
フです。まだキャリアは1年、手さぐ
りで頑張っている毎日ですが、大きな
悩みがあります。それは2カ月前に入
居してきた女性のこと…。

その入居者とは、小島ナツさん(仮
名)。要介護2で、大正7(1918)
年生まれの84歳。これまで、2歳下の
妹、ハルさん夫婦と同居していました
が、数年前から痴呆症状が見られるよ
うになったのです。昼夜逆転の生活が
続き、徘徊をして、隣町で保護される

半壊した地蔵堂のあった山福大倉社(左)と、共同生活社(右)



が、勃発します。

「米騒動拡大、女房一揆に専主も繰り出して二千名、米穀商を襲ひ、遂に制止の警官と衝突す」(大正7年8月8日・報知新聞)と記された女房一揆は、1道2府32県に波及、政府は鎌倉のため10万人の軍隊を出動させました。このように経済が逼迫し、不穏な空気に包まれていた時代だったのです。

さらに大正7年、9年は(統計値のない昭和19年から21年の戦争による混乱期を除いて)20世紀以降の死亡数が第1位、第2位を記録した年です。

これは、世界的に大流行した「スペイン風邪」によるもの。この悪性のインフルエンザによる死者は、世界中で約4000万人とされています。日本でも約38万人ほどが亡くなったというのが、現在の定説です。

当初は「昨今、東京を中心として関東一円に、三日風邪が大流行している。この風邪は従来のインフルエンザと趣を異にし伝染力激しく、一名相撲風邪と称されるのも、誰か一人罹ると、たちまちその一家が枕を並べて倒れるという状態だからである」と(大正7年5月25日・東京日々新聞)という記事に代表されるように、死に至る伝染病だという認識はされていませんでした。ところが、秋から年末にかけて、スペイン風邪は日本中で猛威をふるいます。

「岡山で患者十万人に達す」(11月2日・山陽新報)、「大阪の死者増え、火葬場が間に合わず」(6日・大阪毎日新聞)、「鉄道員の欠勤多く、輸送に不便が出る」(7日・東京日々新聞)、「地方火葬場へ送るため停車場に死体の山」(9日・東京日々新聞)など、社会機能が低下するほど、多くの死者が出ました。

翌8年には小休止するものの、9年にはまた大流行し、足かけ4年に渡ってスペイン風邪の猛威は続いたのです。また、大正時代は乳児の死亡率が非常に高く、平均寿命が驚くほど短い時代でした。「最近の統計によれば、欧米各国では大抵四十歳位の平均寿命を保っているのに反し、わが国では二十九歳と七ヵ月と云う、憂うべき統計を示して居る」(大正10年9月20日・都新聞)。

この後、国を挙げて予防・治療対策を推進、上下水道を整備するなど衛生環境も整い、平均寿命も伸びました。昭和22(1947)年には男性50・06歳、女性53・06歳、平成12(2000)年には男性77・64歳、女性84・62歳と世界最高の長寿国となります。

大正 小さいころに 父も兄弟も 亡くしてたナツさん

小島ナツさん、ハルさんの姉妹が生まれ育った時代は、生きることが非常に困難な時代でした。ナツさんにはお兄さんが二人、お姉さんが一人いますが、小さいころに亡くなったそうです。また、妹のハルさんが生まれた翌年、父親が結核のために、36歳の若さで亡くなり、母親は昼夜を問わず働きに出ていました。「だから、妹の面倒

はいつも私が見ていたのよ」と、ナツさんは、由美さんに昔話をするようになりました。「それで、ナツさんは妹さんと、あんなに仲がいいんですね」と由美さんは相づちを打ちます。

このように、利用者の生まれ育った時代を知ることは、利用者より深く理解するのに役立ちます。また、コミュニケーションを深めるきっかけにもなります。「日本史は苦手だったわ」というハルパーの方も、もう一度歴史の教科書をひもといってみませんか？

表 わが国の20世紀人口動態推移

(単位：人)

年次	年次	出生数	死亡数	乳児死亡数
明治33	1900年	1,420,534	910,744	220,211
38	1905年	1,452,770	1,004,661	220,450
43	1910年	1,712,857	1,064,234	276,136
大正4	1915年	1,799,326	1,093,793	288,634
9	1920年	2,025,564	1,422,096	335,613
14	1925年	2,086,091	1,210,706	297,008
昭和5	1930年	2,085,101	1,170,867	258,703
10	1935年	2,190,704	1,161,936	233,706
15	1940年	2,115,867	1,186,595	190,509
18	1943年	2,253,535	1,213,811	195,219
22	1948年	2,678,792	1,138,238	205,360
25	1950年	2,337,507	904,876	140,515
30	1955年	1,730,692	693,523	68,801
35	1960年	1,606,041	706,599	49,293
40	1965年	1,823,697	700,438	33,742
45	1970年	1,934,239	712,962	25,412
50	1975年	1,901,440	702,275	19,103
55	1980年	1,576,889	722,801	11,841
60	1985年	1,431,577	752,283	7,899
平成2	1990年	1,221,585	820,305	5,616
7	1995年	1,187,064	922,139	5,054
12	2000年	1,190,560	961,637	3,830